

静岡文化芸術大 二本松ゼミ生

春野の民話全集落で採録



住民が語る昔話を採録する静岡文化芸術大の学生
＝浜松市天竜区春野町

浜松市天竜区の山間地で民話の調査に取り組む静岡文化芸術大文化政策学部の二本松康宏教授のゼミはこのほど、同区春野町の仇山集落で採録調査を実施した。同町で調査を始めて6年。今回の訪問で町内全40自治会での集団採録を終えた。ゼミ生は、失われゆく地域の記憶に光を当てるべく、来年1月まで調査を続ける。

失われゆく記憶に光

同区での採録調査は2014年に開始し、今年で10年目を迎えた。水窪町を皮切りに、龍山町、春野町で調査を続けてきた。歴史の表には現れない民話の伝承を目的に、聞き取りを重ね、毎年成果を書籍にまとめている。二本松教授は「昔話はいわば『心と記憶の遺産』。暮らしの変化と過疎化が進む中、それらを伝え残す意義は年々高まっている」と説く。

春野町での調査は18年に着手。年度ごとに対象地区を設定し、集団採録と個別訪問を積み重ねてきた。過去の採録者への再訪問や先輩からの助言など、ゼミ内でのノウハウの継承も行われている。

仇山集落の住民6人を対象に、集団採録を行ったのは学生4人。テープレコーダーを向けながら、住民の話に熱心に耳を傾けた。

副自治会長の梅谷誠利さん(67)は、村人がタヌキやキツネにだまされた伝説を語り伝えた。「この集落にはあまり言い伝えや昔話はないと思っていた。ただ、

学生がうまく聞き出してくれるので思い出すことができた」と顔をほころばせた。

記録は書籍にまとめ、来年3月に出版する予定。国際文化学科3年の小鍋未羽さん(20)は「土地の人の話を聞く中で、初めて見えてくるのがたくさんある。地域の記憶をきちんと伝えられるように心がけたい」と話す。

(天竜支局・垣内健吾)